

高麗・朝鮮陶磁と日本人

専修大学 樋口淳

0 はじめに

陶磁をめぐる韓半島と日本との技術交流・文化交流を考えてみたい。このテーマは、いくつもの大きなトピックスを孕んでいる。

歴史という時系列で考えてみれば、まず水稻耕作と弥生式土器の問題がある。水稻耕作の文化は、中国の長江流域から日本と韓半島南部に伝えられたのだが、この文化には韓半島では櫛目文土器、日本では弥生式土器と呼ばれる独自の焼き物が伴う。

つぎに韓半島に、轆轤を用いて還元焼成によって高温で堅く焼きしめられた陶質土器と呼ばれる焼物が登場すると、その技術が日本に伝えられ須恵器を生み出す。須恵器は5世紀から12世紀まで、長く焼成されつづけ、日本各地に多くの窯址を残している。

韓半島は、10世紀になると高麗青磁の時代を迎える。これは中国越州窯の技術の移入によるが、たちまちのうちに完成の域に達し「翡色青磁」として高い評価を受けた。

同じ時代の日本は、やはり中国の強い影響のもとに猿投・瀬戸の独自の陶磁を生み出すが、青磁の技術をみがくことはない。

15世紀の韓半島は、粉青沙器の時代である。そして15世紀後半には、中国の影響のもとに青花白磁の技術も伝えられる。同時代の日本は、室町の茶寄合いの隆盛をむかえ、青磁や天目を中心とした中国の名品を輸入し、唐物（中国製）茶碗や茶入れの全盛期をむかえる。この時代に、わずかではあるが高麗青磁も移入された。

そして16世紀、室町の派手な茶文化は終焉し、村田珠光から武野紹鷗をへて利休にいたり、いわゆる「わび茶」が全盛期をむかえると、高麗茶碗と和物茶碗が唐物を圧倒する。とくにこの時代に高い評価をうけた井戸茶碗は、多くの謎を秘めている。

喜左右衛門井戸をはじめ数々の国宝、重要文化財の指定をうけた井戸茶碗は、もちろん韓国から移入されたものだが、当時の韓国ではまったく評価されなかったし、現在もまたその評価は変わらない。日本各地には、少なくとも200を越える伝世の名品が残されていると言われるが、韓国では皆無に等しい。一体、どこの窯で焼かれたかも正式には特定されていない。

16世紀も末さしかかって問題とされるのは、壬辰倭乱、日本で言う文禄・慶長の役と、それに伴う朝鮮陶工の渡来である。韓半島を侵略した西南諸藩の大名たちは、折からの茶陶の隆盛に注目し、多くの陶工を意図的に連れ帰った。その結果、萩、上野、高取、薩摩などの今日でも日本を代表する名窯が生まれた。なかでも鍋島直茂に従った李参平（金ヶ江参兵衛）は、磁土を発見し日本に初めて白磁の技術をもたらしたとされる。

その一方で、安土・桃山時代にはじまった高麗茶碗の隆盛は、江戸時代に入っても衰えをみせなかった。対馬藩を窓口として釜山の倭館に注文がたえず、韓国や日本の陶工が韓国の土や釉薬を用いて多くの注文茶碗を焼いた。これらの茶碗は「御本茶碗」と呼ばれ、今日でもその多くが伝世し、珍重されている。

明治以降の近代化のなかで、陶磁器は、その実用性とは別に、絵画や彫刻とならぶ美術品として評価されるようになり、美術館や博物館に陳列され「鑑賞」の対象とされる。いわゆる「鑑賞陶磁」の誕生である。この時、高麗青磁は中国陶磁とともに、いち早く高い評価をうけ、フランスのギメやイギリスのデイヴィット卿などによって紹介され、多くの優

品が海外に流出した。

しかし奇妙なことに、朝鮮王朝の粉青沙器や白磁は、省みられることはなかった。これを最も早い時期に評価したのは、日本の柳宗悦である。彼は、韓国陶磁に関する先駆的な研究を残した浅川伯教・巧の兄弟に導かれて朝鮮王朝の陶磁の美に開眼した。柳は、当時の有力な文学運動であった白樺派の理論的な指導者であったので、志賀直哉を始め、多くの日本の文学者に朝鮮王朝陶磁「李朝」の美しさを伝えた。

これに端を発した「李朝趣味」は、さらに青山二郎等を通じて小林秀雄、川端康成、井伏鱒二などの文学者や文化人たちの間に浸透し、日本における朝鮮王朝陶磁の地位を決定的なものとした。今日、朝鮮王朝の陶磁は世界的に評価され、各地の美術館に収蔵されているが、日本のコレクションは際立っている。

本稿においては、こうしたさまざまなトピックスのなかから、とくに唐津を選び、壬辰倭乱をはさんだ韓半島と日本との間の文化と技術の交流について考察してみたい。

1. 唐津における発掘の現状

数多い日本陶磁のなかでも、唐津はもっとも発掘調査が進み、窯社の研究が盛んな陶磁の一つである。それは、茶の世界で古くから「一井戸、二楽、三唐津」または「一井戸、二萩、三唐津」と呼び習わされたように、人気が高く、すでに江戸後期から古窯社を掘り、茶道具に使えそうな遺物を発見すると、これを「掘り出し唐津」として商品化してきた経緯にもよる。

しかし本格的な調査研究が始まるのは、大正末から昭和初期にかけてで、骨董商の金原京一、古陶磁研究者の水町和三郎、陶芸家の中里無庵などによって丹念な調査が行なわれた。なかでも、骨董商をいとなんでいた金原京一は、それ以降の研究に欠かせない窯社地図「肥前古窯社地図」「九州古窯社地図」を作成するかたわら、1935年には「唐津焼」という論文を公表し、古窯社を岸岳唐津・慶長唐津・椎ノ峰唐津・御用唐津・高麗唐津に分類した。

金原は、さらに戦後1947年に発表された「古唐津窯社概観」によって、これを整理し、岸岳古唐津・寺沢古唐津・武雄古唐津・多久古唐津・平戸古唐津にわけて体系化した。これは、今日の唐津研究の分類の基礎をなすものである。(注1)

第2次世界大戦戦後は、さらに学術的な調査や研究が進み、1946年の加藤土師萌、1956年の鍋島直紹・水町和三郎を初めとするさまざまな優れた業績がある。佐賀県教育委員会の東中川忠美の調査によれば、16世紀から17世紀前期までに焼かれた唐津焼の古窯社は、現在まで「陶器のみを焼いた窯が140箇所、陶器と磁器の両方を焼いた窯が58箇所あり、合計198箇所の窯が発見されている」。(注2) わずか1種類の陶磁をめぐるこれほど多くの窯社が確認されたケースは、世界でもめずらしいのではないだろうか。

2. 唐津の時代区分

唐津の時代区分はさまざまあるが、本稿ではとりあえず

- ① 壬辰倭乱渦中の文禄2年(1593年)2月に岸岳城主波多三河守親が朝鮮よりの帰国の途中、豊臣秀吉によって突如領地を没収された時期まで。(この事件を契機に、いわゆる「岸岳崩れ」という陶工の離散が発生したと考えられる。)

② 寛永 14 年 (1637 年) に佐賀鍋島藩が行なった有田周辺の窯場統廃合の時期まで。

③ 窯場統廃合以降

の 3 つの時代に分けて考察を進めることとする。

唐津焼の起源については、大きく言って二つの説がある。一つは、その起源を室町後期とする説で、中里逢庵、中里重利など長年にわたり地元に着して発掘調査を繰り返してきた地域の研究者によって支持されている。(注 3)

この説の有力な根拠には、1985 年の松浦党佐志氏一族の屋敷跡発掘調査の現場から中国・朝鮮の陶磁にまじって唐津古窯の皿と茶碗が出土したことである。この屋敷の年代は、15 世紀中期から 16 世紀中期と推定される。さらにまた、天正元年 (1573 年) に織田信長に滅ぼされた福井市一乗谷の朝倉屋敷の焦土層から古唐津の花生の陶片が発見されていることがある (注 4)。さらに傍証としては、北海道の上ノ国館跡や青森県の浪岡城址からの出土陶片の例もあげられている。(注 5)

これに対立するもうひとつの説は、荒川正明、大橋康二など博物館を中心とした研究者たちの主張である。彼らは、唐津以外にも多くの日本陶磁を対象をひろげ、その上限を 1580 年とする。たとえば出光美術館の荒川正明は、その『唐津』のなかで、

「この 30 年ほどで、歴史時代の考古学は飛躍的に進歩しました。中世から近世における代表的な都市遺跡の出土資料をもとに、当時使用された陶磁器の編年がほぼ出来上がろうとしています。唐津焼が室町時代以前の遺跡から出土したという報告は、管見にふれるかぎり皆無です。もし室町以前に唐津焼の生産が開始されていたなら、少なくともその時代の九州の遺跡から出土してもいいはずです。やきものの器はあくまでも商品であり、消費地に流通させるために生産するのですからね。」と述べている。(注 6)

この二つの説の間には、かつてのような大きな隔たりはなく、方法的にも考古学的な遺跡調査と商品としての陶磁の流通という二つの枠組みに落ち着いてきている。

唐津の始まりの時期のいかんにかかわらず、陶工たちの生活は、壬辰倭乱によって大きく変化する。この点に関しては、研究者の間に異論はない。

文禄 2 年 2 月に波多三河守親が、豊臣秀吉によって突如領地を没収され、身柄を常陸の佐竹義宣にあずけられると、陶工たちは離散し、帆柱、飯胴甕のような岸岳古窯は消滅する。いわゆる「岸岳崩れ」である。

しかし波多氏に代わって新しく領主となった寺沢志摩守は、利休門下のすぐれた茶人でもあったので、唐津の陶磁はすみやかに再興した。

この時期に、大切なことが二つある。第一は、唐津と美濃の交流であり、第二は壬辰倭乱を契機とする朝鮮陶工の渡来である。

中里逢庵は、この時期に前後して渡来した主要な陶工を中島浩気の『肥前陶磁史考』等に依拠しながら、次のように整理している。(注 7)

【山口県】

李勺光 慶尚南道井韋登出身。坂倉家の祖。

李敬 勺光の弟。坂高麗左衛門。

【福岡県】

八山 高取八山。慶尚南道井韋登出身。高取焼の祖。

尊階 上野喜蔵。慶尚南道泗川郡十時郷出身。上野の焼祖。寛永 9 年 (1632 年) 細川忠利

に従い熊本県八代に移り、高田焼の祖となる。

【佐賀県】

尹角清 大島彦右衛門（大島家初代）。唐津藩御用陶工。

李参平 金ヶ江参兵衛。鍋島家家老多久安順に従い渡来した。元和2年（1616年）有田天狗谷に移り、白磁器を完成させた。

宗伝 深海新太郎。慶尚南道金海出身。武雄古唐津内田山小峠窯の祖。

百婆仙 宗伝の妻。宗伝死後、一子平兵衛と協力して小峠窯を経営したが、寛永8年（1631年）有田稗古場に移り、白磁を焼く。

【長崎県】

巨関 今村弥次兵衛。慶尚南道昌原郡熊川面出身。平戸御茶碗窯御用陶工。

翳女 高麗媼。釜山神官の娘。椎の峰陶工中里茂右衛門の妻。夫の死後、一子茂右衛門を連れ、元和8年（1622年）佐世保市三川内長葉山に移る。

朴正意 小山田佐兵衛。長崎県波佐見町材木の百貫窯の祖。

祐慶 長崎県波佐見町井石の永尾皿山。

【鹿児島県】

金海 星山仲次。薩摩帖佐・御里・豎野窯の祖。

金和 二代星山仲次。豎野焼。

申主碩 田原友助。豎野焼。

申武信 田原万助。友助の弟。豎野焼。

朴平意 清右衛門。薩摩串木野窯。苗代川焼の祖。

【沖縄】

張一六（張献功） 仲地麗仲。琉球湧田窯の祖。

中里逢庵は、これに続けて「16世紀末に渡来した陶工は記録上では韓国南部地方の人々が多い。釜山市を中心とした地方および晋州市を中心とした地域で、いずれも15世紀から16世紀にかけて、日本茶人達に賞玩されたいわゆる高麗茶碗を作っていた地域である」と書いている。（注8）興味深い指摘である。（注9）

この「岸岳崩れ」から寛永14年（1637年）に佐賀鍋島藩が行なった有田周辺の窯場統廃合の時期までが、唐津の黄金時代である。後に述べるように、さまざまの曲折はあったが、歴史に残る優品が各地の窯から、つぎつぎと生まれた。

寛永14年、鍋島藩は、有田周辺の窯場の整理統合をはじめた。これは、増えすぎた窯場による薪の乱伐を防ぐという大義があったが、その一方で1610年代に始まった磁器生産が軌道にのり、市場を席卷し、唐津のような陶器を追い落としたとい事実も見逃せない。

この整理統合によって、おもに日常雑器を焼いていた唐津の窯場は廃棄され、日本人陶工826人が追放され、唐津の窯としてはわずかに黒牟田の山辺田窯のみが残された。

磁器窯の優位は、鍋島藩のみならず、周辺の平戸藩や大村藩でも進行し、磁器との市場競争に敗れた唐津は、磁器との競合をさけて新しい市場をもとめ、大きく変質してゆく。

新しい唐津の技術革新は功を奏し、18世紀後半まで生き延びた。

3. 「やきもの戦争」以前の唐津

壬辰倭乱渦中の文禄 2 年に岸岳城主波多三河守親が、豊臣秀吉によって突如領地を没収され、陶工が離散した「岸岳崩れ」の時代まで、岸岳周辺には飯胴甕上・下 2 窯と帆柱窯を中心に岸岳皿屋、道納屋谷、平松、岸岳大谷、小十官者の 8 つの古窯が存在したと考えられる。現在、飯胴甕下窯のみが原型をとどめ、遺構として保存されている。

この窯は、日本最古の割竹式の登り窯であり、形式は岸岳古窯群に共通する。戦後まもなく岸岳古窯中最古とされる帆柱窯を調査した加藤土師萌は、窯の最下層に宋の釣窯を思わせる斑唐津の陶片を多数発見した。釣窯風の釉は韓半島の会寧付近に見られるもので、加藤によれば咸鏡北道の鏡城郡朱南面のものと共通するという。ここから、唐津の会寧起源説がとらえられ始めた。

岸岳に城をかまえた波多氏をはじめ、周辺の佐志氏、呼子氏などは、名にし負う松浦党の海賊大将としてよく知られている。彼らは、高麗王朝から朝鮮王朝にかけて、倭寇として韓半島から中国沿岸を荒らし、永享元年（1429 年）にいたって朝鮮王朝との間に歳遣船貿易の道が開かれるまで、その暴挙をやめなかった。

「海東諸国記」によれば、岸岳城主波多下野守源泰がはじめて朝鮮王朝に使者を送ったのは 1468 年である。（注 10）当時、朝鮮王朝は済浦、塩浦、釜山浦のいわゆる三浦を開いて日本との交易にあたったから、波多氏がこれらの交渉を通じて、韓半島から進んだ技術をもった陶工と割竹窯を招来した可能性はきわめて高い。

（注 11）

しかし、ここに大変興味深いのは、帆柱窯と飯胴甕上・下 2 窯の間に技術的に大きな違いがあることである。

帆柱窯からは、いわゆる「斑唐津」と呼ばれる藁灰を主成分とする失透性の釉薬をかけた陶磁が出土する。これは、先にのべた韓半島北部の会寧付近に特徴的なものとみられる技法である。ほかに木灰釉、長石釉、鉄釉、伊羅保釉があり、長石釉単味の「本手瀬戸唐津」の茶碗もこの窯場で焼かれたものと思われる。釉薬の下に鉄砂で模様を描きたいわゆる「絵唐津」も出土するが、その文様は抽象的であり、第 2 期に頻出する絵唐津とは趣を異にする。その他、藁灰釉をかけたうえに口辺から鉄釉をかけた「朝鮮唐津」茶碗も出土した。

これに対して、飯胴甕窯からは「斑唐津」は出土しない。木灰釉、長石釉、鉄釉、伊羅保釉のみで、木灰釉は、還元焼成で青磁風の「青唐津」に、酸化焰で黄褐色の「黄唐津」になる。この窯からは、茶陶としての評価の高い彫唐津茶碗の陶片が出土している。絵唐津の文様は、帆柱と同様に抽象的である。また飯胴甕下窯からは、染色の型紙を用いたと思われる「摺り絵」の技法を用いた陶片も出土する。

このように 2 つの違った性格の窯が、岸岳の麓に並ぶように築かれているのは、どういう理由によるだろうか？ 私たちはそこに、技術の異なる二つの陶工集団を想定することができる。とくに帆柱の藁灰釉の技術が、朝鮮あるいは中国系のものであるとすれば、その技術を差異化し、自らの特徴とした技術者集団が独立していたことは興味深い。

もちろん釉薬のほかにも、「割竹式」という窯の様式や「蹴轆轤」という独特の道具があり、それはおそらく共通していたのだから、この二つの窯の関係は複雑である。しかし、同時代に、隣接しながら、複数の起源をもつ技術が対立しながら、交流していたことは否定できない。

岸岳時代の古窯で焼成された陶磁は、甕、壺、鉢、皿、片口、徳利、ぐい呑みなどの日常雑器がほとんどだが、なかには彫唐津茶碗、本手瀬戸茶碗のような茶陶も含まれる。千利休が所持した三筒のひとつ奥高麗茶碗「ねのこもち」も、おそらくは帆柱で焼かれたものであると推測される。利休は天正19年（1591年）に自刃しているので、「利休所持」の伝承が正しければ、この茶碗は岸岳古窯のものとなる。

安土桃山時代には、茶陶は高価な商品として取引されていた。唐津が茶陶として本格デビューするのは第二期以降だが、岸岳古窯の陶磁も、すでに茶陶をめざし、商品化されていた形跡が残されている。

4. 「やきもの戦争」を契機とした美濃・唐津の技術・デザイン交流

壬辰倭乱によって、唐津は大きく変わり、質・量ともに最盛期を迎える。

唐津変化の要因は、3つあるように思われる。

第一は、壬辰倭乱の拠点名護屋城の建設によって、唐津が京都・大阪という陶磁の消費地と直結されたこと。

第二は、安土・桃山の新興茶陶の先進地であった美濃との技術交流が促進されたこと。

第三は、韓半島からの新たな陶工集団の渡来したこと、である。

出光美術館の荒川正明は、唐津の最盛期の到来を次のように語っている。

「(…)古唐津の最盛期は伊万里時代、つまり慶長期(1596~1615)頃といましたが、それはやきものの質も量も大幅に変化し、作風も多様化したからです。奥高麗茶碗や絵唐津の皿鉢類、朝鮮唐津の徳利や水指ほか、いわゆる古唐津の器形、釉薬、文様がこの時期に出揃った。それに伊万里時代(=慶長期)の古唐津は、畿内はもちろん船便の流通経路がある日本海側を中心に、北海道まではほぼ全国に大量に行き渡っています。東海と関東は瀬戸・美濃の流通圏だからそれほどではないにしても、ほかの地方では大阪の出土例と同様、瀬戸・美濃の器を圧倒する勢いでシェアを伸ばしていたようです。」(注12)

天正19年(1591年)秋、豊臣秀吉は、朝鮮侵攻の前線基地として名護屋城の築城を開始する。大阪城と同じ規模の天守閣をもつ壮大な建築であったが、秀吉は得意の割普請で黒田孝高、加藤清正、黒田長政、小西行長らの九州諸大名を中心に全国諸大名の力を糾合し、数ヶ月で完成させた。

この築城に当たって普請奉行をつとめたのが寺沢広高であり、彼はその後も後備衆の一人として名護屋に滞在し、文禄2年(1593年)に岸岳城主波多三河守親の後を襲って所領を受け継ぎ、唐津藩主となった。彼は、美濃の出身で、同郷の古田織部とも親しく、ともに利休門下の茶人であった。

壮大な名護屋城には茶室も設けられ、いまでもその遺構が残されている。古田織部は、利休死後の茶文化をになつた大茶人であるが、とくに瀬戸・美濃の茶陶に関わりが深く、織部焼をはじめとする「織部好み」の茶陶は一世を風靡した。彼もまた、天正2年3月より文禄2年(1593年)8月まで名護屋に滞在した。この間に、織部が岸岳古窯の茶陶製作を主導し、彫唐津を始めとする名品の誕生に関与したことは、十分に想像できる。

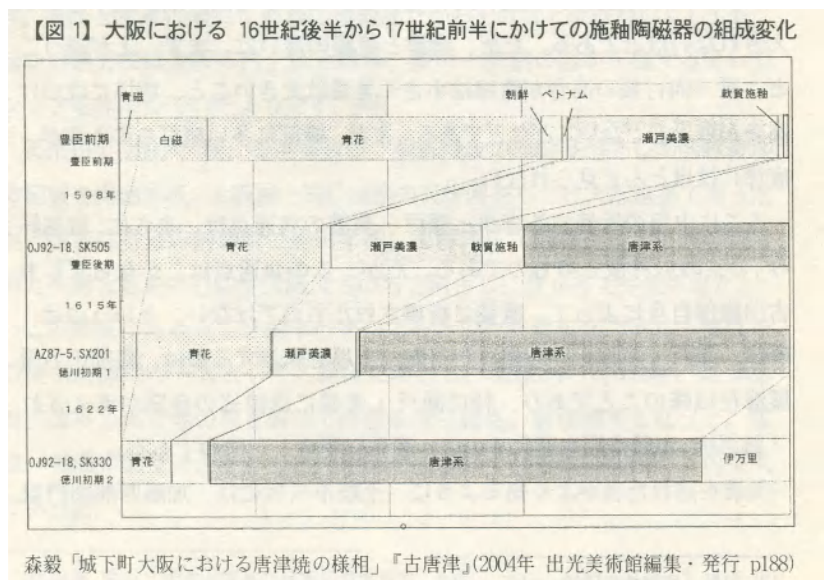
この期に唐津と瀬戸・美濃陶磁との交流が始められた。この二つの名陶の相違点を中里逢庵は次のように述べている。(注13)

「唐津と美濃の陶器を比較すると、意匠に多くの共通点が見いだされる。形の上では、轆轤で丸く作ったものを手のひらで四方になぶった形、四方の隅を指で押さえた形、足付高台、深向付のるい座などがある。とくに沓茶碗、耳付水指、花入、向付の作り方などまったく同工異曲である。また、文様が一緒に、ススキ、葦、松、梅、竹、筍、柳、藤、おもだか、つる草、松山、千鳥、烏、雁、兎、人物、楼閣、橋、網干など数えきれないほどである。ただ、唐津と美濃の違いは、まず、土が違うこと、皿・向付類の高台が唐津は小さく美濃は大きいこと、唐津にはつけ高台がほとんどないことなどである。また、織部に多い型打ちのものが、唐津にはほとんど見られない。」

ここに中里の指摘する唐津と瀬戸・美濃の共通点は、まさに「織部好み」の茶陶の特徴そのものである。だが、この共通点は、かならずしも古田織部自身によって、直接に指導されたものではない。というのは、唐津、瀬戸・美濃という優れた茶陶が市場を席卷するのは、織部の名護屋滞在以降のことであり、特に瀬戸・美濃に唐津式の登窯が導入され「織部焼」が最盛期を迎えるのは、慶長以降のことなのである。

美濃を訪れた者がよく知るように、土岐市久尻には、加藤四郎衛門尉景延が築いたと言われる元屋敷窯の遺構が残されている。この窯の由来を記す「瀬戸大竈取立由来書」（1986）によれば、景延は唐津から訪れた森善右衛門という浪人に美濃の窯の欠点を指摘されて、唐津に向かい、登り窯の技術を移入したという。元屋敷窯以前の美濃では「大窯」と呼ばれる独自の窯で志野をはじめとする美しい陶磁を製作していたが、これ以降は登り窯による大量生産が普及し、大量の織部を京・大阪の市場に提供することとなる。

安土・桃山時代から江戸初期にかけての考古学調査や消費生活研究の近年の成果は、このことをよく示している。たとえば大阪歴史博物館の森毅の「城下町大阪における唐津焼の諸相」によれば、大消費地大阪の1598年以前の地層からは出土する日本陶磁は瀬戸・美濃が圧倒的であるのに対して、1598年から1615年の豊臣後期には唐津が瀬戸・美濃を量的にしのぎ、1615年以降は、圧倒する。(図1)



また堺の町を調査した堺市埋蔵文化センターの土山健史の「堺出土の陶磁器組成について」によれば、16世紀末まではほんのわずかであった唐津が1615年の焦土層からは大量に見られるようになり、それ以降は次第に伊万里に席を譲っていく有様がうかがえる。(図2)

さらに近年の発掘によって、京都市三条通の一角、中之町から大量の桃山陶磁が出土した。コンテナ220箱にもおよぶ量で、ごみ捨て穴からぎっしり詰まった状態で出土してお

り、同じ器種の製品が大量にま
ままっていることが特徴で、とて
も一軒の商家で使われたものとは考
えられない。このような出土例は3
箇所あり、ほかに江戸時代の伝承
も含めると4箇所となり、いずれ
も三条通の一角に集中している。

(注14) 当時三条界限には「せと
物や町」という町があり寛永初期
の古地図『都記』にもこの町名が
見られる。

ここに、肥前佐賀領主の鍋島勝
茂から国許の家老に下された書状
がある。

(前略) 此比、如水同前ニ古織
部殿其方へすき参候処、其元へ罷
居候唐人やき候かたつき、茶碗座
に出候、其二付而、三条之今やき
候者共、其地へ可罷下様承候、此
中も罷下、やかせ候て持ちほりた
る由、むさとやき候ハぬ様可申付
候、恐惶謹言

信守 勝茂 二月十日
生三まいる

大手前大学の岡佳子によれば、

これは慶長7年(1602年)のものと推測される。勝茂が、黒田如水とともに古田織部の茶
会に出席した折に、国許の唐人が焼いた茶入や茶碗が出た。「三条之今やき候者共」が彼
等に注文茶器を焼かせて持ち帰っている。むざむざと焼かせぬように、という趣旨である。

岡によれば、この「三条之今やき候者共」とは「三条通に店を開き、焼物を取引し、瀬
戸物屋とも呼ばれた商人と見た方が自然」であるという。(注15) 彼らは、おそらく古
田織部とも親しく、そのデザインした木型や型紙や焼物を見本として所持し、売れ筋の流
行の品を「唐人」たちに注文生産したのであろう。

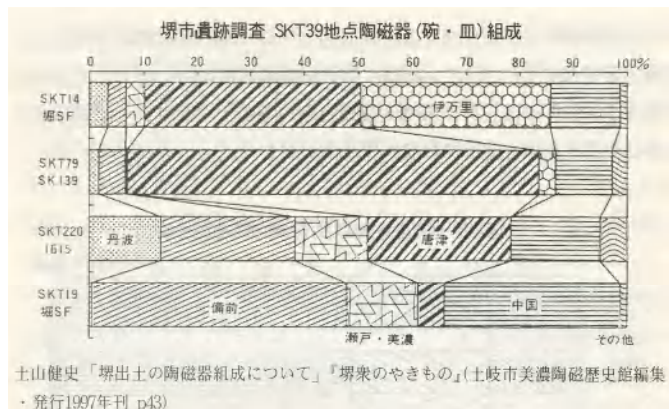
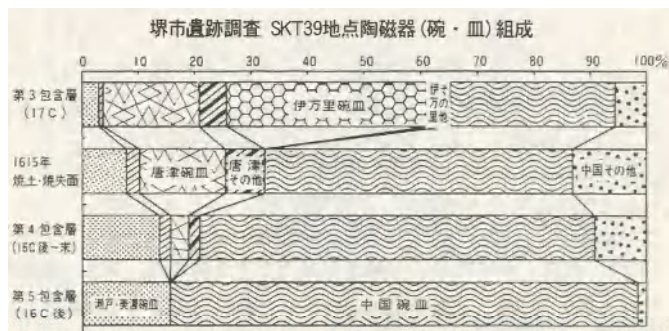
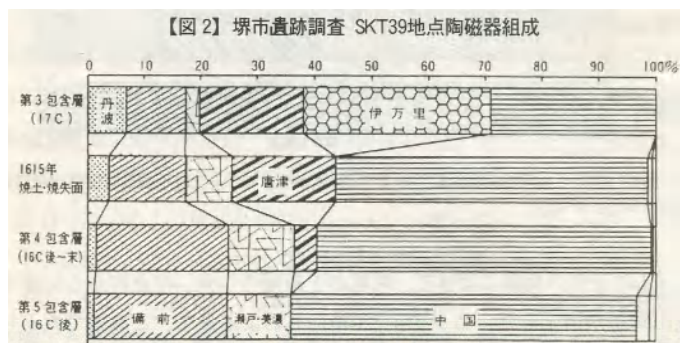
それでは、ここで注文品を焼いた唐人とは誰だろう？

そこには、おそらく二つの流れがあったものと思われる。

その一筋は、壬辰倭乱の以前から岸岳の古窯で唐津を焼きつづけていた陶工たちである。
彼らは、波多氏の滅亡以降、岸岳古窯を去り、椎の峰を中心に活動を再開した。

あと一筋は、壬辰倭乱以降に渡来した陶工たちである。

この2つの陶工集団が、どのような関係にあったかは定かではないが、主要な窯場は唐



津藩と鍋島藩が境を接する現在の伊万里地区に移動する。中里逢庵は、この地域の唐津を「松浦古唐津」と呼び、技術的な違いによって、①道納屋谷窯系、②飯胴甕窯系、③李朝系の3つの系統に分け、道納屋谷窯系と飯胴甕窯系を岸岳陶工を中心とした諸窯、李朝系を新しい朝鮮陶工グループ中心の諸窯としている。

中里によれば、この3つのグループのうちもっとも積極的に「織部風の絵唐津・叩き唐津」を作ったのは飯胴甕窯系の諸窯で、とくに旧唐津藩領にある焼山窯、甕屋の谷窯、市若屋敷窯の諸窯は「甕屋の谷グループとでも称されるような窯である。特に、甕屋の谷と市若屋敷両窯は隣接しており、胎土も作りも紋様もまったく同一で区別がつかない。甕屋の谷窯と焼山窯とは五百メートル位はなれており、胎土は異なっているが、紋様はまったく同一である。腕の良い画工がかけもちで働いていたと想像される。」(注16)

慶長7年に鍋島勝茂が、「むさとやき候へぬ様可申付候」と国許に書き送った書状にみえる「唐人」とは、このような朝鮮陶工集団のことであったのではあるまいか。

勝茂の父である鍋島直茂が、いったいどれほどの朝鮮陶工を伴って帰国したかは明らかではない。「葉隠聞書」第三には、直茂が帰国に際して金公ら陶工6、7名を連れ帰り、佐賀市金立山で焼物を焼かせたが、陶工たちは後に伊万里市松浦町藤の川内に移ったと記されているが、実際の数はいくら多いかはわからない。

中島浩気の『肥前陶磁史考』によれば、平戸藩主の松浦鎮信は、慶長3年に朝鮮からの帰国に際して男女125名を連れ帰ったというが、「尤も此内陶工と称する者は、僅に十人に過ぎざりしといはれてゐる」と記している。(注17)伊万里にはじめて白磁をもたらしたという李參平(金ヶ江參兵衛)は、鍋島家の家老多久安順に従って渡来した陶工集団の長であった。しかし、壬辰倭乱の後に佐賀鍋島藩領に展開した無数の唐津の窯をみれば、そこに活躍した陶工の数も知れよう。

ただ、ここで彼等がいかなる技術をもった集団で、いかなる陶器をこの地で焼いたかは、大きな問題である。

彼らは、まず、一般に伝えられてきたように朝鮮王朝の白磁を焼く、官窯の陶工たちではなかったという推測がなりたつ。彼らは、たしかに優れた轆轤の技術と絵付けの技をもっていたが、同時に「叩き」の技法の名手でもあった。たとえば、中里逢庵が「李朝系」としたグループのなかで最も優れた窯の一つ藤の川内窯では、叩き作りの「朝鮮唐津」水指や徳利の名品を焼いている。朝鮮王朝の白磁に、叩きの技術はない。

また、渡来した陶工は、たしかに朝鮮王朝特有の器型や文様を有した陶磁を生産した。たとえば、唐津の文様と「鶏龍山」と日本人が呼び習わす粉青沙器の名品とは、明らかに共通点がある。しかし、この2つを仔細に比べれば、いくつも疑問が湧いてくる。

とくに、高台の違いは著しい。鶏龍山の場合には、かならず高台裏まで釉薬がまわっているのに対して、唐津の場合は必ず高台まわりの土を見せている。これは何でもないのである。大切なポイントである。茶の文化に育まれた日本陶磁の美意識にとって、高台とその周辺の土味はその陶磁の価値を大きく左右するのである。

それでは、「朝鮮陶工たちは、日本の茶趣味にあわせて土をあらわにしたのか」といえば、それだけでもない。唐津と鶏龍山では、高台の削り癖が根本的に違うのである。

壬辰倭乱によって渡来した陶工の多くは、武士身分に取り立てられ、日本人陶工よりも高い地位を与えられた。これは、領主支配層が彼等の「即戦力」を評価したからに違いあ

るまい。彼らは、当時の日本人にとってきわめて高価であった茶陶を焼くことを期待され、直ちにそれに答えることが出来たのではあるまいか。

鍋島勝茂が「むさとやき候ハぬ様可申付候」と恐れた甕屋の谷窯に見られる茶陶の注文生産は、唐津の各地で起こっている。「白磁の祖」金ヶ江参兵衛が開窯したとされる多久高麗谷窯ですら「古唐津中でも優れた絵唐津を作った窯で、特に織部風の絵唐津の優れたものを焼いている。」この絵唐津の技法と白磁の技法との違いは著しく、中里逢庵が、「李参平と多久高麗谷窯とはまったく関係がないようである」と推論するほど、絵唐津として完結した見事な出来であった。（注 18）

ことほど左様に、壬辰倭乱以降、岸岳古窯以来の陶工に合流した「新しい朝鮮陶工」のもつ優れた技術と適応力は、群を抜いている。彼らは、おそらく選りすぐりの集団であり、当時の朝鮮王朝の趣味よりも、「茶陶」という日本趣味にかなった陶磁に以前から馴染んでいた人々であった可能性が高い。壬辰倭乱を機に、自藩の産業振興をはかった大名達が、陶工なら誰彼かまわず連行してきたとは、推測できないのである。

5. 唐津から伊万里へ

全盛期を迎え、大量生産体制をしいた唐津は、わずかの間に白磁に地位を奪われ、姿を消していく。

『有田町史』によれば、有田・伊万里地域への磁器の導入には、3つの系統があった。一つは、よく知られる金ヶ江参兵衛の系統である。二つ目は、家永壱岐守の系統。三つ目は、深海宗伝の系統である。

金ヶ江参兵衛については、本人が多久家に差し出した「皿山金ヶ江三兵衛高麗より罷越候書立」という文書の写しがある。この文書の現代語による紹介を『有田町史』から引用する。

「三兵衛は朝鮮から日本に渡来してから数年間は多久長門守（多久安順）に仕えた。そして丙辰の年（元和2年=1616年）から有田皿山に移住して今年で38年になる。多久から有田皿山へ移住した者は18人で、全員が轆轤をもち、焼物細工の技術を身につけている。野田十右衛門のところの唐人（朝鮮よりの渡来人）も子供8人、木下雅楽助のかくせい（意味不明）子供2人、東の原清元の唐人子供3人、多久本皿山の者3人で、右の者たちもみな轆轤をもち、焼物細工をすることができる。三兵衛が専属に雇用している者は、高木権兵衛のところの唐人の子4人、千布平右衛門の所の唐人の子3人、有田百姓の子の兄弟2人、伊万里町の助作。合わせて10人である。また各地から集まっている者は120人で、それらの人たちはすべて三兵衛の支配化にある。」

『有田町史』の筆者は、このことから金ヶ江参兵衛が「創始期における有田陶業界の指導者であったことを物語るものであろう」と結論し、傍証として参兵衛がこの文書に「尉」という高い身分をしめす字を加え「三兵衛尉」と署名していることを上げている。（注 19）

第二の系統の家永壱岐守に関しては、1773年の陶石採掘権に関する訴訟に際して提出された「乍恐御詫言申上口上覚」という文書がある。これを要約すると、家永壱岐守は、もと佐賀郡高木村の陶工であったが、太閤秀吉に土器を献上し「九州土器元」という名を許された。壱岐守は、さらに鍋島直茂の命により唐人から製陶の技術を学び、その一族は金立山、藤の川内、小溝原など良土をもとめ、壱岐守の孫の正右衛門が遂に白川山の天狗谷

に辿り着き、南京焼（磁器）を焼くに至った。その正右衛門が天狗谷で窯焼をしている頃、多久美作守が朝鮮より連れてきた陶工が現れて「自分が一手に焼物をしたいので」と日本人陶工を追放するように願い出た結果、日本人陶工は焼物職を営むことができなくなった。しかし正右衛門は、上記のような由緒を有していたので、代々許されて窯を焼くことができた、というのである。（注 20）

これは随分と時代の下る文書だが、1637年に断行された窯場の整理と、日本人陶工の追放を考えれば、信憑性のある話である。また、山本常朝の『葉隠』に付随する「葉隠聞書」に記録されたエピソードにもこれに関連する話が収められているので、佐賀ではよく知られた話であったのだろう。

第3の深海宗伝の系統についての記録は、有田町稗古場の報恩寺の境内にある「萬了妙泰道婆之塔（通称・百婆仙の碑）」の碑文のみである。

この碑によれば、宗伝は朝鮮深海（注・金海）の出身で、壬辰倭乱に出兵した武雄領主後藤家信の帰国にともなって渡来し、内田山小峠窯を開いた。小峠窯では、象嵌三島、花三島、搔落し、彫三島などの粉青沙器の陶片が多数出土し、胎土はよくないが染付けの磁器も出土する。また、志野や織部に似た絵唐津も出土し、その絵柄は磁器とも共通する。この窯の磁器は、後期になると胎土も白くなり中国明朝風の「初期伊万里」に共通した性格を示すようになった。（注 21）

宗伝の妻の名は不詳だが、元和4年（1618年）に没すると、内田村に住んでいた高麗人を伴って天狗窯に隣接する有田町の稗古場に移住した。『有田町史』によれば、彼女は「顔形が温和でゆったりしていたので、孫たちは彼女を敬愛して『百婆仙』と呼んだ。死亡したのは明暦2年（1656年）3月10日で、享年96歳であった」という。（注 22）

報恩寺の石碑は、時を経てほとんど解読不能であり、伝承の域をでない部分もあるが、宗伝および百婆の生き方は、当時の渡来陶工の歩みを知る上で貴重である。百婆仙の一族が、金ヶ江参兵衛と協力して、磁器の発展に力をつくしたことは、十分推測できる。

以上のような文書や伝承を踏まえて、今日では有田・伊万里地域の磁器の創製を金ヶ江参兵衛と結びつけて語るのが一般である。しかしながら、唐津（陶器）から伊万里（磁器）への転換は、きわめて複雑な歩みをたどったに違いない。その曲折を正確にたどることは至難の業だが、近年では、丹念な窯址調査と焼成の技術の違い、窯の形式や道具の違いを踏まえて、新しい視点を導入する研究者も登場し始めている。

たとえば有田町教育委員会の村上信之は「唐津焼の成立と初期の窯業」のなかで、陶磁器の焼成時における重ね焼きの有無とその技術に注目し、初期の唐津から伊万里にいたる流れを5つの時期にわけている。（注 23）

- (1) 目積みしない時期（窯業成立～1590年代）…ほとんど目積みが行なわれない段階
- (2) 胎土目積み段階前半(1590年代後半～1600年代)…胎土目積みが多いが、目積みしないものや砂目積みなど、多様な窯詰め技法が混在した段階
- (3) 胎土目積み段階後半(1600年代～1610年代)…胎土目積みが主体となる段階
- (4) 砂目積み段階前半(1610年代～1620年代)…胎土目積みと砂目積みが混在する段階
- (5) 砂目積み段階後半(1620年代～1640年代)…砂目積みが主体となる段階

村上によれば、第1期（窯業成立～1590年代）は「肥前に近世窯業が成立した時期から、

おおむね文禄・慶長の役を通じて再度新たな技術が導入され、それにより唐津焼の生産地規模が急拡大する以前までと位置付けることができる。」「窯詰め技法としては、焼台に1点ずつ載せて焼く方法が一般的で、皿などを重ね焼きすることは少なかった。こうした窯詰め技法が主体となる要因は、一つには技術の性格的な面も考慮すべきであろう。しかし、まだ目積みして量産するほどの需要が確立されておらず、また、目積みに向かない藁灰釉製品などが主体を占めることなども加味する必要がある。」

第2期(1590年代後半～1600年代)は、「文禄・慶長の役を通じて渡来した多くの陶工達によって、主体的に伊万里周辺に窯場が築かれ、生産地としての規模が急拡大した時期として位置付けられる。大阪市の調査などでも、この段階を境に突然唐津焼の流通量が激増することが知られている。」「窯詰め技法としては、相対的には胎土目積みが多く用いられた。しかし、(韓半島の)複数地域からの導入技術が直接芽吹いた時期であるため、まだ肥前としての統一に乏しく多種多様な窯詰め技法が混在する。たとえば、時間的同時性が確かな一つの窯の焼成床面の出土資料でも、目積みしないもの、胎土目積み、砂目積み、陶石目積みなどが混在する例も知られる。こうした複数の目積み技法の混在は、多地域から技術導入した一つの証として捉えられ、また、目積みしないものの併存は、唐津焼のなかで(高級な茶陶と日常雑器との)製品によるランク分けが明確に確立したことを表している。

第3期(1600年代～1610年代)は、「胎土目積みの技術が定着し、急速に生産規模が拡大すると、次第に陶工集団が新天地を求めて肥前の各地に移住し、あるいはそこで単発的に操業していた窯の技術を取込み、または駆逐して、新たな窯業地が拡大した」時期である。周辺部に拡大した窯業地では「窯業地の規模が拡大するにつれ、供給総量に占める雑器の割合は高くなり、次第に唐津焼は雑器化の方向へと歩みはじめる。」絵唐津の「鉄絵と器形や釉薬の組み合わせも法則性が消滅し、」「前半期のような複雑な絵柄は稀」となる。大量に生産され、流通する日常雑器が、次第に「茶陶」としてのブランド・イメージを失墜させていくのが、この時代の特徴である。

第4期(1610年代～1620年代)は、「有田町周辺地域の窯業が、中国から断片的な技術を導入して、磁器という画期的な新製品を開発し、急速に台頭してきたことに端を発する。これによって、それまで外れの窯業地としてもっぱら雑器生産に傾注していた有田町周辺が、一気に肥前の主導権を握る核となる生産地として生まれ変わった」時期である。「唐津焼の施釉は原則的には、高台部を残して施される場合が多いが、この段階には高台部まで施釉されるものも珍しくなくなる。こうした全面施釉は、前段階以前にも一部の窯場では認められるが、肥前全体で普及するのはこの段階に至ってからである。」金ヶ江参兵衛や家永壺岐守が、有田・天狗谷に窯を開き、百婆仙が稗古場に窯を移したのは、まさにこの時期であつたらう。しかし、胎土目の技術が砂目に移ったのは、大きな謎である。韓半島の朝鮮王朝官窯の白磁には、胎土目も砂目も存在する。この胎土目から砂目への技術転換は、韓半島から砂目の白磁を焼く技術を持った「新たな陶工集団」が渡来したことを、一つの仮説として推測させる。

第5期(1620年代～1640年代)には、「有田町周辺地域において磁器生産が軌道にのると、陶器はますます画一的な雑器としての色合いが濃厚となる。」(注24) こうした中で、唐津陶磁は採算性を失い、寛永14年(1637年)には有田・伊万里の窯は整理・統合され、黒

牟多の山辺田窯を残してすべて廃棄される。九州陶磁文化館の大橋康二によれば、「山辺田窯は製作が難しい大皿（大鉢とも）作りが得意であったから」生き残った、と考えられる。

（注 25）そして、この窯は後に「色絵創始に関わる代表的な窯」として再登場するのである。有田・伊万里地区以外の武雄などの唐津では、鉄絵が急速に減らし、大形製品や刷毛目・象嵌、二彩唐津などを量産し、新しい時代に対応をはかっていく。

6. 初期伊万里の朝鮮・中国の技術とデザイン

白地に藍の模様を描いた染付けは、中国では既に元代に完成し、15 世紀に韓半島に伝播した。日本の場合は 1610 年前後になって、ようやく朝鮮陶工の手によって創始されたが、有田泉山で良質の陶石が発見されると、一挙に生産力を高め、技術水準を上げていく。

初期の伊万里を愛する者なら誰でも知っているように、その技術は朝鮮王朝陶工の特徴をとどめている。器は、素焼きをしない所謂「生がけ」のために、わずかに歪んでいる。釉薬も一様には行き渡らず、表面に釉だまりができやすい。釉をかけた時に、器をおさえた指跡が残ることも多く、皿や鉢や碗の高台は、不均衡なほどに小さい。焼成時に、磁土に含まれた不純物が表面に噴出して、小さな点となったり、匣鉢で守られていないので灰などが降ってきた痕がある。要するに、中国の官窯に見られる完全無欠な染付けとは、およそ正反対のものである。

この不思議な味をもった初期の伊万里と出会った時、京都や大阪や堺の商人達は大いに喜んだに違いない。なぜなら、中国官窯の見所のない四角四面に飽き飽きした日本の茶人たちは、わざわざ中国に「祥瑞」や「古染付け」のような歪んだり、釉が飛んだりした染付けを注文して、買い付けていたからである。

伊万里が、その最初期から中国の「古染付け」に見られる山水や動植物のデザインを売り物したことは、こうした市場の要請によるものであったに違いない。

そして時は、あたかも明末・清初の中国国内の乱れた時期で、中国の窯業地は疲衰し、貿易は衰えていた。この時勢に、中国沿岸部の腕の良い陶工や絵師も流出したかもしれない。生まれたばかりの伊万里は、京都・大阪・堺の大市場を、あっという間に席卷したのである。たとえば、図 2 に示した「堺衆のやきもの」を見ればよくわかる。1615 年の焦土層には、見られなかった伊万里が、たちまち唐津と中国を圧倒していく様が、具体的に知られる。

しかし、この初期伊万里を焼いた朝鮮陶工集団とは、どのような人たちだったのだろうか？金ヶ江参兵衛の文書が示すように、壬辰倭乱の折に渡来した人々が、絵唐津を焼きながら、苦節 20 年、昔習い覚えたの陶技を忘れず、故郷の「砂目高台」を復活させたのだろうか？

これは、いかにも考え難い説である。初期の伊万里の皿と絵唐津とは、あまりに違った技術に支えられている。轆轤も絵付けもまるで別、同じ陶工集団がこれを実現したとは、考えられない。

さらに疑問を呈すれば、絵付けの問題がある。

周知のとおり、韓半島の青花白磁（染付け）は、16 世紀以前と 18 世紀以降に大きく分かれ、17 世紀は鉄絵が中心で、青花はほとんど存在しない。

さらに、16 世紀までの韓半島の青花白磁（染付け）は、中国明代の陶磁と絵画の影響が

きわめて強く、初期伊万里の絵柄とは、まったく性格を事にする。

また、18世紀後半までの韓半島では、青花の釉薬であるコバルトは、きわめて貴重で、絵付けは、きわめて慎重に専門の絵師の手でなされていた。およそ初期伊万里のような民間の器のために大量消費されることはなかった。選りすぐりにエリート以外には、青花の絵付け師は存在しなかったのである。

私がここで想像するのは、またしても交易と消費経済の問題である。

天下分け目の関が原から大阪夏の陣に至る戦を制した徳川家康は、一方で鎖国にむかう流れを作りながらも、その実、対外貿易にはきわめて積極的だった。伊万里が、染付けの製作を開始するやいなや、思うさまコバルトを消費しているのは、原料を得やすい平戸や長崎という対外交易地を近くに控えていたからであり、製品をさばくために京都・大阪・堺をはじめとする市場への流通経路を確保していたからである。伊万里にとって、それまで中国陶磁と唐津が開いてくれた商業の道が、大いに役立ったはずである。明末・清初の政情不安定にともなう中国陶磁の供給不足を埋めながら、技術水準をあげ、新しいデザインを開発し、中国陶磁の市場を奪い取っていく。

瀬戸や唐津の開いた茶陶と日常雑器の市場を蚕食する。大きな登り窯と豊かな陶石を用いて大量に生産される丈夫で白い日常の器は、上層の町人や武士達のあいだで人気を博したに違いない。

伊万里は、ますます混迷していく中国情勢を背景にして、1640年に入ると色絵を開発し、古九谷や柿右衛門、さらには鍋島といった多様で洗練された商品を開発し、1659年にはオランダ東インド会社と組んで、世界市場に乗り出していくのである。こうした大きな生産と消費のうねりのなかで、朝鮮陶工たちの影は失われ、すべては歴史の闇の中に沈んでいったかに見える。

7. まとめ 海賊大将の時代の終焉と鎖国

中世までの東アジアは、広い意味で中国を中心とする中華世界システム内部で機能する朝貢交易の枠組みの内であった。古代・中世の日本は、この枠組みのなかで遣隋使、遣唐使を送り、足利義満は日明貿易を再開した。

この時期の北九州には鴻臚館や大宰府がおかれ、博多は東アジア貿易の拠点として栄えた。

しかし、朝貢貿易の公式ルートの周辺には、いつも私貿易の集団が存在し、活発にモノとヒトと文化・技術の交流を推進してきたことも事実である。このアンダーグラウンドな交流は、もちろん非合法であり、略奪や人身売買が日常茶飯であったことは言うまでもない。

とくに14世紀から16世紀にかけて猛威をふるった倭寇は、中世東アジアの略奪的な私貿易集団の代表格である。彼らは、自らを「海賊大将」と呼び、対馬・北九州・瀬戸内を拠点として、略奪と交易を重ねたが、16世紀になると多国籍化し、中国・台湾・琉球・韓半島・九州をつなぐ海のネットワークを形成した。こうした略奪集団の圧力を軽減するために、朝鮮王朝が所謂「三浦」を開き、日本との交易拠点としたことは、すでに述べた通りである。(注 26)

壬辰倭乱の渦中の文禄2年(1593年)に、突如として領地を没収され城を追われた波多

三河守親は、松浦党に属し、海賊大将の一人であった。豊臣秀吉が、なぜあの時期に無謀な朝鮮侵略を企てたかは謎だが、秀吉の計画のなかに「海賊大将たちを整理統合して、日本の海を再編すること」が含まれていたことは間違いないだろう。波多三河守親は、こうした政策の大きな流れのなかに巻き込まれて姿を消したといってもよい。

検地と刀狩によって日本の土地と農民を支配することに成功した秀吉が、日本の海と海民の支配に乗り出したのである。

壬辰倭乱は、当然挫折し、豊臣氏は滅びた。しかし、この「土地と農民の支配」と「海と海民の支配」の政策は、徳川氏に見事に継承されたといってもよい。徳川家康は、秀吉の後継者として朱印船交易を拡大し、東南アジアに船をおくり、ポルトガルに加えて、オランダ、イギリス、中国の交易船を積極的に迎え入れた。

そして三代将軍家光の時代にいたって、この海洋政策は、所謂「鎖国」として整理・統合される。正規の対外交易は長崎のみで行い、オランダと中国を迎え入れ、ほかに対馬（対朝鮮王朝）、琉球（対中国・東南アジア・ヨーロッパ）、松前（対ロシア・北方世界）の3つの口を維持する。これによって、海と海民の支配は完成し、パックス・トクガワナという200年以上も地域紛争のない時代が訪れたのである。

本稿の主題とした、唐津から伊万里への流れは、以上のような日本の対外政策の大きなトレンドに呼応している。

まず「岸岳崩れ」までの時代は、海賊大将の時代を反映しているといえるだろう。波多氏は、北九州という地の利を生かし、中世的な海のネットワークを利用して岸岳山麓に朝鮮王朝の技術を呼び寄せ、当時最先端の割竹式登り窯を築いて窯業をはじめた。そこには、おそらく中国沿海の陶工たちの技術も生かされたに違いない。

壬辰倭乱以降、この岸岳古窯の陶工たちは、思わぬ運命に翻弄される。彼等には、秀吉の朝鮮侵略を契機に渡来した「新しい朝鮮陶工集団」との技術協力と、近世消費社会にむけての大規模な生産拡大が待っていた。彼らは、最盛期を迎えた京都・大阪・堺の焼物市場に「高級ブランド」の茶陶と使いやすい日常雑器を提供する。この時代の唐津窯社は、一説に200箇所とも300箇所とも言われている。それが全て登り窯である。岸岳の時代には、10箇所満たなかったのだから、短期間のうちにいかに多量の唐津が焼かれ、市場に供給されていったかが推測される。

そしてさらに、この爆発的な生産の拡大は、「白磁」という新しい技術開発につながっていく。

白磁の誕生が、いかなる朝鮮陶工集団によって担われたかは、謎である。しかし複数の出自と技術をもつ、複数の集団が関与したことは、間違いない。

豊臣から徳川へという、時代の流れに押し流されながらも、「鎖国」以前の東アジアの海は、依然として流動的であった。壬辰倭乱によって、途絶えたはずの北九州と朝鮮王朝との交流も、水面下では活発に動いていたのであり、ヒトもモノも行き来していた。

1610年代に生まれた初期の白磁（初期伊万里）には、砂目という「新しい朝鮮王朝の技術」と古染付けという中国の絵付け師のデザインが生きている。

そして1637年に至ると、再び状況は急展開する。有田・伊万里地区の窯場は、白磁中心に整理・統合され、窯業は藩の経済と結びつき、厳しい統制のうちにおかれた。これが、家光による鎖国とほぼ時期を同じくするのは、興味深い。

しかしながら、したたかな伊万里は、この時期にも色絵という「新しい技術」の開発に成功する。パックス・トクガワナという平和の時代を背景に、江戸という新しい大消費地をもターゲットとして国内市場を支配する。

鎖国を分岐点として、伊万里は、朝鮮王朝の技術と袂をわかち、中国陶磁を手本としながらも、鍋島をはじめ独自の道を歩みはじめる。壬辰倭乱を契機として渡来した朝鮮陶工によって開かれた萩、上野、高取、薩摩などの名窯も、根を絶たれて初期の力を失い、数ある日本のローカルな藩窯の一つとして埋もれていく。鎖国を契機として、技術は完全に国産化し、独自路線を確立してしまうのである。

しかし、これも象徴的なことなのだが、国内市場の成熟によって技術革新をとげた伊万里は、さらなる中国市場の混乱を受けて、供給不足に困惑したオランダ東インド会社からの要請を引き受け、以後100年間に渡って世界各地に輸出されてゆく。鎖国は、長崎という国際交易港を控えた伊万里にとっては大きな問題にならず、むしろ追い風になったのである。伊万里は、高品質の中国陶磁に目の肥えたヨーロッパ市場の要請に応えるために、さらに技術水準をたかめ、ヨーロッパやアジアの嗜好に応えるためのデザイン上の工夫を重ねていく。

今日でも、ヨーロッパの街角のウインドウ越しに、伊万里を見かけることがある。かつて伊万里をコピーしたマイセンやデルフトなどの作品を、美術館で見かけることもある。インドネシアのジャカルタにも、南アフリカのケープタウンにも、その足跡は残されている。

しかし、朝鮮王朝では、ついに伊万里が歓迎されることはなかった。朝鮮王朝の青花白磁は、日本白磁のルーツとして、多大な影響を与えながら、孤高の道をたどり続けた。

注 と 図

- 1 中里逢庵著『唐津焼の研究』2004年 河出書房新社刊 p16
- 2 前掲『唐津焼の研究』p22-23
- 3 北波多村史編纂委員会編『北波多村史・上巻』（1961年 北波多村史編纂委員会刊行）p176 には、①「唐津焼沿革文書」（中里太郎右衛門蔵）による神功皇后時代説、②八代国治による大和時代末期説、③金原京一による鎌倉時代末期（元享年間）説、④水町和三郎による南北朝初期または室町初期説、⑤佐藤進三による桃山末期（1592 - 1597）説が紹介されている。
- 4 中里太郎右衛門（中里逢庵）「唐津焼」『古唐津の流れ』（林屋晴三監修 1993年 読売新聞社刊）所収 p148
- 5 中里紀元編『古唐津の歴史』2002年 松浦文化連盟刊 p47
- 6 荒川正明「唐津が変えた日本のやきもの」『唐津』（荒川他著 2004年 新潮社刊）所収 p37
- 7 前掲『唐津焼の研究』p42-43
- 8 前掲『唐津焼の研究』p43
- 9 中里逢庵を13代目とする中里家については、中島浩気は次のように記している。
「中里又七 初代又七（太郎衛門）は、元韓人彌作の子などなどいはれしも、実は鬼子嶽（岸岳）崩れの残党にて世を憚る身の素性を明らかにせざるため、斯く言い触らされし

みでなく。当時は勝れし陶工には皆高麗人として祀り上げた時代であった。故に又七に於いてもそれをもつけの幸いと、韓人に成りすました者と察せられる。」(中島浩気著『肥前陶磁史考』1936年 肥前陶磁史考刊行会刊 p107)

この記述からみれば、中里家の祖は「岸岳崩れ」以前の唐津陶工集団に属する工人であり、やはり韓国よりの渡来人であったと推測するのが正しいと思われる。

10 前掲『北波多村史・上巻』p160

11 近年になって中国河南省の鄭州博物館の鈞窯専門家によって、中国江南地方の陶工が北九州に渡来し、帆柱窯を開窯した可能性も指摘されている。(中里逢庵『唐津焼の研究』p77 参照)

12 前掲 荒川「唐津が変えた日本のやきもの」p47

13 前掲 『唐津焼の研究』p105)

14 土岐市美濃陶磁歴史館編集・発行『三条界隈のやきもの屋』2000年 p7

15 岡佳子 「洛中三条界隈と桃山茶陶」『三条界隈のやきもの屋』p39

16 前掲『唐津焼の研究』p49

17 前掲『肥前陶磁史考』中島 p215

18 前掲『唐津焼の研究』p51-52

19 有田町史編纂委員会編『有田町史・陶業編1』1985年 有田町刊 p10

20 前掲『有田町史・陶業編1』p20

21 前掲『唐津焼の研究』p59

22 前掲『有田町史・陶業編1』p27

23 村上信之「唐津焼の成立と初期の窯業」『古唐津』(2004年 出光美術館編集・発行 p182)

24 前掲 「唐津焼の成立と初期の窯業」p183-186 参照)

25 大橋康二著『有田・伊万里』2002年 淡交社刊 p82-86

26 村上章介著『中世倭人伝』1993年 岩波書店刊参照

図1 森毅「城下町大阪における唐津焼の様相」『古唐津』(2004年 出光美術館編集・発行 p188)

図2 土山健史「堺出土の陶磁器組成について」『堺衆のやきもの』(土岐市美濃陶磁歴史館編集・発行 1997年刊 p43)

要約

本稿は、陶磁をめぐる韓半島と日本との技術交流・文化交流に関する試論である。このテーマは、いくつもの大きなトピックスを孕んでいるが、今回は、壬辰倭乱期前後 80 年から 100 年ほどにわたる唐津焼の変遷をとりあげた。

中世までの東アジアは、広い意味で中国を中心とする中華世界システム内部で機能する朝貢交易の枠組みの内であったが、公の交易のかげには、常に私貿易の集団が存在した。

とくに 14 世紀から 16 世紀にかけて猛威をふるった倭寇は、中世東アジアの略奪的な私貿易集団の代表格である。

草創期の唐津焼を主導した波多氏は、自らを「海賊大将」と呼ぶ、倭寇の棟梁でも会っ

た。草創期の唐津は、海賊大将の時代を反映しているといえるだろう。波多氏は、北九州という地の利を生かし、中世的な海のネットワークを利用して自領に朝鮮王朝の技術と呼び寄せ、当時最先端であった割竹式登り窯を築いて窯業をはじめた。そこには、おそらく中国沿海の陶工たちの技術も生かされたに違いない。

壬辰倭乱以降、唐津古窯の陶工たちは、思わぬ運命に翻弄される。彼等には、秀吉の朝鮮侵略を契機に渡来した「新しい朝鮮陶工集団」との技術協力と、近世消費社会にむけての大規模な生産拡大が待っていた。彼らは、最盛期を迎えた京都・大阪・堺の焼物市場に「高級ブランド」の茶陶と使いやすい日常雑器を提供する。この時代の唐津窯社は、一説に200個所とも300個所とも言われている。

この爆発的な生産の拡大は、それまで日本では知られなかった「白磁」という新しい技術開発につながっていった。1610年代の白磁の誕生が、いかなる朝鮮陶工集団によって担われたかは、謎である。しかし複数の出自と技術をもつ、複数の集団が関与したことは、間違いない。安土・桃山から江戸へという、時代の流れに押し流されながらも、「鎖国」以前の東アジアの海は、依然として流動的であり、壬辰倭乱によって、途絶えたはずの北九州と朝鮮王朝との交流も、水面下では活発に動いていたのであり、ヒトもモノも行き来していたからである。

そして家光による鎖国とほぼ時期を同じくする1637年に至ると、再び状況は急展開する。有田・伊万里地区の窯場は、白磁中心に整理・統合され、窯業は藩の経済と結びつき、厳しい統制のうちにおかれた。だが、したたかな伊万里は、この時期にも中国を手本として、色絵という「さらに新しい技術」の開発に成功する。鎖国を分岐点として、伊万里は、朝鮮王朝の技術と袂をわかち、古九谷、柿右衛門、鍋島をはじめとする独自の道を歩みはじめた。技術は完全に国産化し、独自路線を確立する。

そして、国内市場の成熟によって技術革新をとげた伊万里は、折からの中国市場の混乱を受けて、オランダ東インド会社からの要請を引き受け、以後100年間に渡って世界各地に輸出されてゆく。

朝鮮陶工の渡来によって生まれた陶磁の技術は、唐津焼から伊万里焼に変身し、「鎖国」を契機に国産化され、国際化されて、世界市場に乗り出して行ったのである。